

ともに励まん



えいりょう
北海道旭川永嶺高等学校 3年次だより 第11号 (通巻106号)

2019, 6, 21 (金)

燃えろ！学校祭



放課後居残り準備期間が始まりました。本番まであとという間だと思います。最後の学校祭、完全燃焼してくださいね。高校時代は人生に一度。できることならいい思い出をたくさん作ってほしい。

ボクの高校時代は「しらけ」が蔓延していて、ボクのクラスは「学校祭不参加」決議をあげたのでした。あわてた生徒会本部は昼休みにクラスにやって来て、「説得」を試みたのですが、「いいべや、おれたち、やりたくないんだわ」というだるーい受け答えをしたように覚えています。が、結局、仮装行列では長崎くんちみたいな竜の山車(だし)と衣装、踊りで優勝したような気がします。変なクラスだったなあ。

町の人々に取材をし、友人宅に泊まり込みで大きな壁新聞を作ったことも、宍戸先生のおかげで思い出しました。

いまでは全道ほとんどの学校で7月に学校祭が行われていますが、ボクが高校に入ったころから、それまで秋開催が主流だった文化祭が「7月文化祭」へと移行していったのです。「共通一次試験」(いまの「大学入試センター試験」の前身)が導入された影響です。そのセンター試験もキミたちで最後。どんどん前前前世の人になってゆく……。

チャレンジ！四字熟語 [12]

★次の四字熟語の意味として適当なものをそれぞれ選び、番号で答えよ。 得点 / 5点

- (106) 換骨奪胎 読み方《 》
 ①中身を取り替える ②外見を取り替える ③現状から引き下がる
 ④大切なものを失う ⑤必要なものを借りる
- (107) 乾坤一擲 読み方《 》
 ①世の中を知り尽くしていること ②自分の実力を過信すること
 ③ゆったりとした心境になること ④新しい分野を切り開くこと
 ⑤いちかばちかの大勝負をすること
- (108) 牽強付会 読み方《 》
 ①たまたま出会うこと ②付いたり離れたりの関係 ③ぴったり一致すること
 ④まちがって解釈すること ⑤無理にこじつけること
- (109) 我田引水 読み方《 》
 ①あやふやではっきりしないこと ②自分に都合のいい言動をすること
 ③根本的な事柄とそうでない事柄を混同すること ④前置きなしに結論を述べること
- (110) 捲土重来 読み方《 》
 ①一度恥をかかされた者が名誉挽回に努める ②一度負けた者が勢力を盛り返して攻め寄せる
 ③一度負けた者が再挑戦して勝者となる

☆☆☆ 来週の行事と時間割 ☆☆☆

水無月 6月	行事等	①②は校時を、(1)(2)は回数をあらわします	★時間割を確認しよう						
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
24	月	6時間							
25	火	7時間							
26	水	6時間							
27	木	7時間							
28	金	6時間							
29	土	公務員模試(5)							
30	日	6月最終日、今年も半年終わり！							

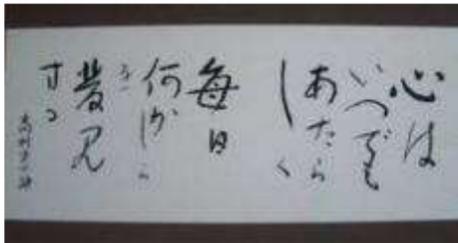
23(日)は「沖縄慰霊の日」…新聞、ニュースなどに注目しよう！

☆ケガなく、トラブルなく、先輩らしく、思い出に残る学祭を！ (文責 伊丸岡)

書いてみる3 半人前

シリーズ「書いてみる」3回目の原稿は「耳」をテーマとしていましたが、教育実習生が来校されていることにちなみ、予定を入れ替えて（8回目までの原稿ができています）ボクの半人前人生について語ってみたいと思います。テレビの「しくじり先生」みたいに、人それぞれにいろんな人生があるんだな、くらいに軽く受け流して読んでみてください。そしてみなさんにはこれからいったいどんな人生が開けていくのか、楽しみです。

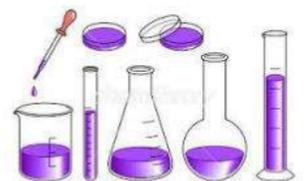
さて、人は、いつから「一人前」となるんだろう？



ボクは実は国語の教師としては半人前です。同じ年数、国語専任でやって来た先生に比べると、半分しか国語の授業を受け持っていないので（半分は書道）。ですから、正直言うと、いまでも教科書の教材、問題集の教材で初めて出会う古典があったり作家がいたりするわけで、その意味では興味が尽きない。高村光太郎が「心はいつでもあたらしく。毎日何かしらを発見する」と書にしたためましたが、共感します。

国語の教師としては半人前、と言いましたが、ボクの高校時代、こんな先生がいたのを思い出します。

1年生の時、生物の担当だったY先生は「ボクは生物は専門ではない」と口癖のように言っていました。2年生でまたその先生に習いましたが、今度は化学。またまた1年間「ボクは化学は専門ではない」という。3年でなんと地学を受け持たれたとき、級友たちと「さすがに今度こそ地学が専門に違いない」と期待していたところ、やっぱり「ボクは地学は専門ではない」と宣言された時にはひっくり返りそうになりました。もちろん、残る物理も専門ではなかったようなのですが……。その先生から教わって唯一記憶に残っている言葉は「器は外側から洗え」というものでした。何かの実験の際、実験器具の洗滌に際して言われたのだらうと思います。が、先生のこの言葉に感じ入ったのではなく、はて、自分はいつも茶碗洗いをするときどうだったか、いつも外側から洗ってるじゃん、この先生、何をもったいぶって言ってるんだろう、別に理科の実験じゃなくたって日常、当たり前の事じゃん、やっぱりこの人に専門はないんだな、という心からの反発心からそう思ったことをよく覚えています（昔のことはよく覚えているもんだ）。



さてボクはこれまで5つの高校で勤務しましたが、どの学校もまったく勝手が違い、転勤すると、それまでの経験がほとんど役に立たなくなる、ということを繰り返してきたように思います。というのも、先日引越しをした際に、「受験指導・国語・小論文」という段ボール箱を見つけ、ちょうどこれからのキミたちに役立つ資料が入っているかも知れないと中をのぞいてみたら、これがほとんど役に立ちそうもなかった。学校が違つと、転勤というより転職といった方がいいくらい、いろんな事が違ってくる。2校目は書道専任、3校目、4校目は国語・書道半々でしたが、かたや医学部にも東大にも入る進学校で、校内小論文模試なども先生が自前で作り採点するような学校、かたや古典文法などほとんど無縁の学校と、本当に「転勤というより転職」といったくらい違いました。本校では初めての国語専任です。



ところで、教員として採用されて最初に勤めた学校は新採用者ばかりが赴任するような道東の学校で、採用同期が5人もいました。ボクは国語と書道を7科目も担当して、毎日毎時間違う授業に追われていました。先輩の先生に相談しても、「あんたは教室に一人で行くんだろ。だったら一人で考えて決めてやれ」という教師生活のスタートでしたから、以後、あんまり人に聞く、という仕事の仕方が身につかなかったかも知れません。授業も忙しかったし部活も年中休みなく、若いからやれたんだなあと思います。ちなみにボクの後任には、国語1人と書道1人が採用されましたので、ボクは2人分の授業を持っていたということになります。

永嶺高校に異動した初年度は隣の席に新採用の先生がいて、それこそあらゆること何でも聞いてきたので、ああ、いまどきの青年は立派だなと、若かりし頃のわが身を恥じ入りました。

で、人生で初めて作った定期考査（国語のテスト）の話。

誰も教えてくれませんから、自分の高校時代のことを思い出しながら、授業で教えたことはすべて出すようにして、問題用紙4枚、解答用紙2枚のテストが完成しました。くだんの先輩教師に「これでどうでしょうか」と見せたところ、「多いな。半分でいい」と言われたボクは事務室にしかなかったコピー機に出向き、B4の問題用紙4枚を半分のB5版に縮小して2枚分とし、解答用紙も同様に半分のサイズに縮小し2枚を貼り合わせて1枚にし、印刷したのでした。なお、当時はワープロもパソコンもない時代でしたから、教科書の本文をコピーしてそこに傍線引いたりしたものを切り貼りして問題用紙を作ったものだから、そうそう容易に問題を半分の量に作り変えるなどという発想には至らなかったものと思われます。印刷も、1台で一瞬にしてできるいまの印刷機と違い、まずファクスという印刷原紙を作る機械で原版を作り、それを輪転機という印刷機にかけて印刷するという、結構手間と時間のかかる作業でしたから。

当日の生徒の反応は、「問題の字が小さい」「解答欄が小さい」「問題は簡単だけれど、量が多い」といったものでしたが、今から思えば、至極まっとうな反応だったわけですね。

これがボクの教師生活草創期における「試験問題半分事件」の真相です。それから三十数年、ボクは進歩したのかどうか。・・・推薦プロジェクトも始動した。志望理由で「自己を見つめる」。何かの参考になればいいが、ならないだらなあ・・・。